

高田 宏 木に会う

新潮社



高田 宏
木に会う



新潮社

木^きに会^あう

一九八九年四月一〇日 発行

一九八九年五月三〇日 二刷

著者 高田^{たかだ} 宏^{ひろし}

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一 振替東京四一八〇八
業務部〇三(二)五六〇五一一・編集部〇三(二)五六〇五四一一

価格はカバーに表示してあります。

印刷所 錦明印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

© Hiroshi Takada 1989. Printed in Japan

乱丁・落丁本は、この面側ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-329507-4 C0095

目 次

縄文杉の下で

7

森は誰のものか

27

幼い二本の木

47

白山のブナ
の森

65

賢者の栖^{すみか}

83

木は水に浮く

101

町の木 121

木の船の時代 141

木でつくる 161

幾何学のない家 179

木のない世界から 197

あとがき 221

装幀・安野光雅

木
に
会
う

縄文杉の下で

1

その木の大きさを測ることはできる。根回り四十三メートル、胸高周囲十六メートル、樹高三十メートル。だが、そんな数字は何も語らないに等しい。

精緻な計測をすれば、その木の実物大のレプリカをつくることはできるだろう。だが、それを都会の公園の中に置いたとしたら、また、ゴルフ場の芝生に置いたとしたら、あるいは、砂漠のどまんなかになに置いたとしたら、どうだろうか。どれも元の木の大きさを表わしはしないだろう。一本の木の大きさは一つとは決まらない。

その木をその場所で見るときも、大きさは一つではない。見る者によって、いろいろに変わる。その木の大きさは、向き合う者の心の内にある。

屋久島の深い森に生きる老杉。

昭和四十一年に見つけられて、縄文杉と名づけられた。屋久島には樹齢千年を越える杉が数多くあり、千年以上の杉を屋久杉、千年に満たない杉を小杉と呼び分けているが、縄文杉はそれらの王者である。杉の王者にとどまらない。標高千五百メートル以上の峰が二十余、千メートル以上なら四十数座を数えるこの山岳島を覆っている森の王者である。奥山にあると言い伝えられてきた幻の巨木である。

推定樹齢七千二百年。三千年と言う人もあるが、こういう木の経てきた時間は今はもう謎である。仮りに伐つてみたところで年輪が数えられるものではない。それに、正確な樹齢を知ったところで何になろう。たかだか百年ばかりの生命の人間には思いもよらない長大な時間を、この木は生きつづけているのだ。

この木の前に立つと、古代人の樹木崇拜がすこし分かる気がする。フレイザーの『金枝篇』には世界各地の樹木崇拜が種々誌されているが、それがどれほど真剣なものであったかを古代ゲルマン法を引いて説いているところがある。フレイザーによると、古代ゲルマン法では、故意に立木の樹皮を剥いだ者に対する刑罰があったという。それは、犯人のへそを抉り出して、彼が剥ぎ取った樹皮のあとへ釘づけし、腹わたが木の幹に巻きついてしまうまで、その木のまわりを追いまわすというものであった。その苛酷な刑罰を当然とみなすだけの樹木崇拜が人びとのあいだにあったということである。

先だつての春、縄文杉の根もとで一晩を明かして、私のなかに、あの老大樹への畏怖と崇敬

とがひろがつていった。近代人の私がほんのすこし古代人に近づいた。だが私はやはり古代人ではありえない。私は木の語る言葉を聴きたかった。数千年のいのちが語りかけているにちがいない言葉を聴きとりたいとねがつていた。古代人には聴こえていたはずである。いまでも、幼い子供のなかには木の言葉を聴く者がいるだろうと思う。しかし近代人であり大人である私には、ついに、かなえられないことであつた。聴いたとは、言えない。言うとしたら、私は木の言葉を聴いたのだろうか、聴かなかつたのだろうか、という疑問形がせいぜいである。縄文杉に会えた喜びのなかに、その淋しさがまじっている。

2

縄文杉にいつか会いたいと思つたのは、もう何年も前のことだ。生まれ代わるなら木か猫がいいと思ひはじめたところである。

三年前（一九八四年）の年の暮れ、屋久島へ行くことがあつた。そのころ或る雑誌に島紀行の連載をしていて、その一回に屋久島をえらんだのだった。もちろんのこと、縄文杉に会うのが何よりの望みだった。キャラバンシューズを履きリュックを背負つて、寝台列車と船を乗り継いで屋久島に着いた。だが、縄文杉には会えなかつた。

縄文杉に会いたいと言う私に、島の山々に詳しい人が言つた。

「冬山登山の経験がありますか」

数日前から山は激しい雪になっているということだった。縄文杉のあたりでは一、二メートル

ルは積もっているだろう、行つて行けなくはないが完全な冬山装備と十分な食糧で出かけて、すくなくとも山小屋で一泊、天候次第ではもつと日数が要るし、なにより屋久島の山に詳しい者が同行しなかったら危険である、という。

未練はあつたが、あきらめた。冬山登山の経験はない。夏山にしても登山というより山歩きというほうがいくらいの経験しかない。体力の自信もない。屋久島の冬山は雪が重く本州の冬山より手強い上に、地形がひどく複雑で、登山道が雪に埋もれてしまったら地図や磁石は頼りにできない、経験だけがものを言う、と聞かされては、あきらめるしかなかった。そのかわり雪がなくなれば楽です。誰でも縄文杉まで登れますよ。屋久島高校山岳部の顧問を長いあいだやっていたその人の話で、私はもう一度屋久島に来なくてはならないと思つた。

翌日、K君の案内で標高千メートルばかりの森をあるいた。K君は学生時代からの登山家で、ヒマラヤ遠征にも出かけている。屋久島の山なら自分の庭のように知っている山男だ。私に体力があればK君と二人で雪の縄文杉へ登ることもできたのだが、危険を避けて標高の低い森をあるくことにした。屋久杉鑑賞保護林とされている森である。その森に行く途中、はじめはツワブキの黄色い花が道端に咲いていたが、折り重なる山々のあいだを縫つてゆくにつれ、冬が姿をあらわし、やがて道がまだら雪になった。鹿児島から船で四時間の南の島とは思えない景色であつた。

気候のよい時には観光客がぞろぞろ歩く森である。だが冬でもあり年末のことでもあつて、その日の数時間、森にいたのはK君と私の二人きりだった。K君と私は、黙つて森をあるきつ

づけた。

そのときの森の時間を私はつぎのように書いた。いま改めて別様には書けないので再録をおゆるしねがいたい。

リュックを背に森へ入った。

暗い森だった。荒々しい森だった。どれが何の木か見分けもつかない。苔が幹を覆い、木が木に生え、太いやマグルマが巨木を這いのぼっていた。森のなかの吊橋を渡る時には岩のあいだを走る水の音があつたが、森はその音をも吸いとってしまう。暗い森の底に雪が光った。

木の生命力があふれていた。公園や寺社の境内で見る木とはまるで別のものだった。一本一本の木が、見る私を初めはおびえさせるほどの原始の貌を持っていた。だがそれ以上に、森そのものが一つの生命のようであつた。それは一本一本の木を越えている何かだった。私は森という生きものの内部をあるいていた。あらゆる物音を吸いとってしまうような静かさのなかに、激しいのちが脈打っていた。何千年の昔もこうであつただろう。或る木は三千年を、或る木は千年を生き、倒れ伏した木の上に新しい木の生命が伸びてゆく。そういう世代交替の姿が目の前にあつた。森はそれらすべてをつつんで生きていた。何千年か何万年か、私にはつかみとれない時が、私のまわりを埋めつくしていた。

巨大ないのちが私を押しつつむ。ここでは人間のいのち、動物のいのちが、脆く、たより

なげに思える。そのぶん可愛く、いとおしくも思える。この森の荒々しく巨大な原始のいのちにとりまかれて、私に何が言えるだろう。荒々しさは狂暴凶悪ということではない。あるがままという意味での自然、また、それゆえの優しさと言いかえてもいい。森の中で私は、森の巨きないのちが私のからだを貫き染めているのを感じていた。どう言ったらいいのだろうか、深い安堵といってもすこしちがう。私の小さなのちが何か測り知れないものにつながれてゆくようであった。自分が無限に小さなものと感じられ、同時に無限に大きなものに溶けてゆく気がした。

会うことのできなかつた縄文杉も、こういう森のなかの一本の木であろう。そのことがおのずと分った。東京にいてテレビで見たり本で読んだ縄文杉は私のなかで森と切り離されていた。縄文杉一本が亭々とそびえ立っているように思いこんでいた。それはちがう。それでは全きいのちとはいえない。『海上の王国』

こう書いたとき、つぎの春が来たらきつとまた屋久島へ渡って、縄文杉の森へ登ろうと思っていた。そして、春が来た。私はいろいろ都合があつて屋久島へは出かけられなかった。しかし、私を突きうごかす力が大きければ、都合などはどうにでもなるはずだ。もしそれが家族の死に目に会うためであつたら、すべての都合を放り出して駆けつけるだろう。私が縄文杉に会うためにそこまですなかつたのは、私の願望が所詮それだけのものに過ぎなかつたのだろうか。それとも、縄文杉とその森は動かないで待っていると思つて安心していたのだろうか。後のほ

うだと思いたいのだが、それはやはり自分への弁解というものだろう。都合があるからといって先へのばしているうちに、いつ病気で寝込んで動けなくなるとも知れないではないか。死んでしまうかも知れないではないか。そうなれば、縄文杉には会わずじまいである。それでいいのか。

縄文杉に会いたいというのは、もともと、世の中のろくでもない「都合」などとは無縁の大きないのちに触れたためであった。それなのに、都合を優先して縄文杉を後まわしにしていた。それは私の生きかたが中途半端であることの証明である。私は自分のなかにその証明を突きつけられて、苦い気持ちだった。

三度目の春、ようやく縄文杉詣でをはたしたのだが、それも考えてみれば、都合がついたからである。やみくもに都合をつけたとは言いがたい。その私に木の言葉が聴きとれると思うほうがまちがいのかも知れない。聖木が衰えはじめたと知ると何をおいても水を持って駆けつけた古代人の心は、私には理解したいと願うだけで、自分のものには出来ないようである。私は自分がやっぱり近代人でしかないことを、苦い気分で噛みしめることになる。

だが、ともあれ、私はあの老杉に会った。

3

屋久島は雨の島だ。その多雨が森を育ててきたのだが、この春も木の芽流しの長雨が降りつづいていた。そのちょっとした晴れ間に島に着いたのは運がよかったのだろうけれど、いくぶ

ん拍子抜けの感じでもあった。役場の傍の桜が日の光を浴びて満開だった。東京の桜はとつくに終わっている。これだけ遠い南の島の桜が今頃咲いているのが異様だった。冷たい長雨に花が遅れていたのだ。

前に来たときに知り合った三省さんと三郎さんが縄文杉へ同行してくれることになっていた。それは前に来たときからの約束でもあったが、私が縄文杉の根もとで寝袋にくるまって一晚を過ごしたいと言い出したことに、二人とも大乗気だった。

三省さんは家族と共に東京から屋久島の白川山しらやまという廃村に移り住んでちょうど十年。三省さんが「聖老人」と呼んでいる縄文杉に呼ばれてこの島にやってきた。

聖老人

あなたが黙して語らぬ故に

わたくしは あなたの森に住む 罪知らぬひとりの百姓となつて

鈴振り あなたを讃える歌をうたう

三省さんの長詩「聖老人」の末尾である。その通り三省さんは、聖老人の立ちつづける山の裾で、百姓・詩人・信仰者として生き、深い平和をしつかりと生きられる場を育てようとしている。六〇年安保の学生活動家からコミュニケーション運動を経て、インドとネパールの家族連れ巡礼のあと屋久島に住むまでの日々やその後の白川山の日々が三省さんの本のなかに、静かに語ら